

図書紹介

C. D. Cowan (ed.): *The Economic Development of South-East Asia*, George Allen and Unwin Ltd, London, 1964. 192p.

ロンドン大学の School of Oriental and African Studies が、かつての外国学校から、discipline 重視の地域研究的な性格にきりかえられて以来、専門的立場からする東洋・アフリカ研究がいちじるしく発展している。

そのひとつとして、1959年以来、フォード財団の援助のもとに、東南アジア史担当のコーウェン教授が中心となって、東アジアおよび東南アジアの経済史研究プロジェクトがすすめられている。1961年7月、アメリカ・ヨーロッパ・アジアから、この問題の専門家を招き、国際シンポジウムをもった。その成果が、*Studies on Modern Asia and Africa* の第3号として出版された本書であり、また第4号として同時に刊行された *The Economic Development of China and Japan* である。

この研究計画は、東および東南アジアの近代史研究において経済史的側面が重要であるにもかかわらず、ともすれば軽視されたこと、あるいは西欧帝国主義の名のもとに、つっこんだ分析がされなかったことの反省にたつ。したがって、じみに近代経済史を分析しようとする。

本書は、コーウェン教授の東アジアおよび東南アジア経済史の簡単だがきわめて興味ある概説からはじまる。それにつづいて収められている論文はつぎの8。

J. Leighton-Boyce 氏の *The British Eastern Exchange Banks: An Outline of the Main Factors Affecting their Business up to 1914*.

リバプール大学の Francis E. Hyde 教授の *British Shipping Companies and East and South-East Asia, 1860-1939*.

シェフィールド大学の Charles A. Fisher 教授の *Some Comments on Population Growth in South-East Asia, with Special Reference to the*

Period since 1930.

ロンドン大学の J. A. M. Caldwell 講師の *Indonesian Export and Production from the Decline of the Culture System to the First World War*.

ノース・カロライナ大学の James C. Ingram 教授の *Thailand's Rice Trade and the Allocation of Resources*.

シンガポール大学の Wong Lin Ken 講師の *Western Enterprise and the Development of the Malayan Tin Industry to 1914*.

ノーザン・イリノイ大学の J. Norman Parmer 教授の *Chinese Estate Workers' Strikes in Malaya in March 1937*.

ロンドン大学の T.E. Smith 氏の *Immigration and Permanent Settlement of Chinese and Indians in Malaya: and the Future Growth of the Malay and Chinese Communities*.

わたくしにとっては、「東南アジア地理」の著者フィッシャー教授の東南アジアの人口史、また「タイ経済発展」の著者イングラム教授のタイ米穀の輸出史、この二つの論文から、とくに教えられるところが多かった。いずれも、データをよく駆使したすぐれた分析である。

しかし、個々の論文はそれぞれ学問的に貴重であるが、それとは別に興味のあるのはコーウェン教授が *Introduction* において、なぜ日本だけが東および東南アジア諸国の近代史において、経済の急速な近代化なり発展なりを行なったかが、シンポジウムの中心問題であったとされているところである。とくに、わたくしの目下の関心点のひとつであるタイと日本との比較がおもしろい。タイが1855~1868年、モンクー国王のもと、米輸出でもって国際貿易に積極的に参加した。この initial stage は日本とはそうちがわなかったのに、なぜ、これにつづく発展がタイにおいて行なわれなかったか。シンポジウムでは3点が指摘されたという。第一は、政治的には独立国ではあったが経

済的には colonial type であったこと、第二は、人口増加率が日本よりはるかに高かったこと、しかも第三に気候的要因が経済人としての活動を阻害しているのではないかとのこと。いずれも示唆にとむ見解だと思われる。

わたくしは、本書の価値はもちろんだが、こうしたシンポジウムが開催され、その成果が出版されたそのことを高く評価したい。(本岡 武)

Maung Maung: A Trial in Burma, The Assassination of Aung San, Martinus Nijhoff, The Hague, 1962. vi+117p.

ビルマで7月19日は Day of Martyrs, 1947年のこの日に暗殺されたオン・サンを国をあげて追悼する。1961年のこの日、たまたまシャン州の首都タウンジーに滞在していたわたくしは、グラウンドに市民・学生生徒が集まって静かにオン・サンをしのぶ大集会に出席し、強い感銘をうけたことを思いだす。政府のオフィスは、ときの大統領や首相の写真がかかかかなくても、必ず軍装のオン・サンの肖像がかかかっている。まさに、オン・サンは建国の父として永遠に追憶的となっている。

このように神格化されているのは、かれがビルマ建国にはたした役割による。しかし同時に、齢わずかに32才、ビルマ独立に先だつ半年前、ラングーン総督府の一室で、かれの新閣僚たるべき同志と会議中、かつて首相の経験のあるウ・ソーの一味によって、白昼殺されたという、ビルマ近代史上最大の悲劇にもよるであろう。

現在ビルマのすぐれた法律家であり、また Burma's Constitution, Burma in the Family of Nations などによって、ビルマ問題の著作家として世界的に知られているモン・モン博士が、ウ・ソー一味の裁判記録をもととして、オン・サン暗殺事件の経過を明らかにした。この事件は、ビルマの政治過程を理解するひとつの鍵であるだけに、いまここに客観的に事件の経過を裁判記録にもとづいて分析された本書のもつ意味は大きいと思われる。

本書は裁判記録を第3章以下にあて、第1章はオン・サン、第2章はウ・ソーの略歴にあてている。オン・サンのことはよく知られているが、ウ・ソーはあまり

知られていない。戦争前に首相となり、勃発直前ロンドンに独立交渉にわたり、勃発とともにイギリスによってアフリカで抑留、終戦後ビルマに帰り、ついに死刑に処せられたウ・ソーの数奇な運命を見ても、また、なぜかれがオン・サンを暗殺することによって政権がとれるとイージーに考えたかということを見ても、つくづくビルマの政治構造だけでなく、ビルマ人そのものの personality や behavior を考えさせられる。政治問題には素人であるわたくしにとって、本書は推理小説のおよびもつかない迫力をもっている。まさに事実は小説より奇なりだ。

わたくしは、著者モン・モン博士をエール大学にたずねたことがあるが、博士はちょうどこのとき visiting lecturer としてのニュー・ヘブンの研究生活を利用して本書を執筆されていた。博士のラングーンにおける生活を思うとき、交換教授としての生活で本書を書きあげたことを喜びたいと思う。(本岡 武)

Atlas of South-East Asia, Djambatan, Amsterdam, 1964. 84p.

東南アジアのまとまった地図帖は、東南アジア研究者の間に渴望されていた。東南アジア全域についてはもちろんのこと、各国別の地図帖も初等・中等教育程度以外のものは全然刊行されていない。唯一の例外は、戦争直前インドネシアについてまとめられた *Atlas van Tropisch Nederland, Topographischen Dienst in Nederlandisch-Indië, Batavia, 1938* だけである。(この熱帯蘭領地図帖は、かなり古くなっているが、今日においても最高水準をゆくものであることを付記しておきたい。)

このたび、*Atlas of the Arab World and the Middle East* を刊行したアムステルダムのジャムバタン社より、これと同じ種類の地図帖が東南アジアについて刊行されたことは、まことにありがたい。

本地図帖のサイズは 25×35cm。表紙と裏表紙の見開きに、東南アジアの歴史地図が8図に収められている。主要なのは5色版で60ページにわたっての東南アジア全域・フィリピン・インドネシア・シンガポール・マラヤ・タイおよびインドシナ3国のそれぞれについての、一般図としての地形図のほか、特殊図としての気候・植生・地質・土壌・政治・人口・民族・土地

利用・産業・交通等の地図、あるいは特定の主要地域については詳細図、首都については都市計画図がおさめられている。そのあと、24ページにわたるロンドン大学 D. G. E. Hall 名誉教授の東南アジア史概説が、多数の写真入りで、加えられている。そして最後に地名索引7ページがある。

この内容から明らかなように、地形図だけでなく、多数の特殊図がおさめられていることを特色とする。だから、本地図帖は自然・民族・産業その他の東南アジアの地理学的特徴を明らかにするのに非常に効果的である。しかも、これにその道の最高権威ホール教授の東南アジア史概説が加わることによって、東南アジア研究の入門書としての意義もきわめて大きい。

しかも、製版・印刷・製本などの地図帖作成の技術はすばらしい。さすがにオランダの出版物だけのことはある。ちょっと非のうちどころがない。とにかく、見ていて飽くことをしらない、たのしい、またおもしろい地図帖である。その詳細なインデックスとあいまって、東南アジア研究者のまさしく座右に置かれるべき地図帖である。推奨してやまない。

ただ、これは atlas であって map でない。たとえば、タイは1/450万の縮尺で示されている。だから実用上不便な点があるのも当然である。しかし、現在東南アジア全域にわたって、米空軍の作成した1/100万がある。これは容易に入手利用できる。さらに、それより縮尺の大きな地図は東南アジア各国からそれぞれ自国について刊行されている。たとえばタイの1/25万などはすばらしい。だから、本地図帖はどこまでも atlas としての目的をもっており、map としては、いくらでも補いのあることを銘記しておきたい。

わたくしは、前号で紹介したフィッシャー教授の東南アジア地理、そしてこの東南アジア地図帖の刊行こそ、東南アジア地理にかんする最近の発展ぶりを如実に示すものだと思う。貴重な業績である。

(本岡 武)

Der Kampf der Götter und Dämonen, aus dem thailändischen Ramakien übertragen von Ch. VELDER, Schweinfurt, 1962. 322p.

タイの民族詩として有名な『ラマキエン』の全訳である。この叙事詩については、これまで René Nico-

LAS: *Le Ramayana siamois, Revue indochinoise, 1928* ほか一・二の文献しか知られていなかったのであるが、いまここに全訳が刊行されたことは誠によることと云わねばならぬ。

インドの大叙事詩『ラーマヤナ』Ramayana は、のちにインドの国民的英雄となり神として崇められたラーマ王子の武勇譚であるが、それだけにインドにおいては勿論のこと、インド文化の波及とともにアジアの各地に流布し、それぞれの民衆にさまざまな影響を与えたことが知られている(筆者の『インドの説話』東京、昭38、pp.10-11. 参照)。特に、東南アジアにおけるラーマ伝説の文化史的意義は大きい。この『ラーマヤナ』のタイ伝本が『ラマキエン』(ラマの讃嘆)であり、現在では舞踊劇として著名である。

『ラーマヤナ』がいつタイに伝来したか、またラーマ(タイでは Phra Ram という)伝説がいつごろからタイ族の間に弘まったか、すべては不明である。しかし、ラーマ伝説の現在における影響は、他の東南アジアの諸民族に比べて、タイにおいて最も著しいことが知られている。まず、タイの現王朝の代々の王は Rama の称号を有して Phra Ram Djakri と呼ばれ、Rama の権化とされる。寺院の祭礼あるいは宮廷の祝宴に際して王が河を渡るとき、王は龍王 Ananta Nakharat (Skr. Ananta Nāgarāja) を像った船に乗り、王の旗には猿王 Hanuman (Skr. Hanumat) が描かれ、王の印章は鳥王 Khrut の姿を示している。いずれも Phra Ram を授けた英雄である。そのほか、王が行列に際して乗る車は『ラマキエン』に見られる天帝 Int (Skr. Indra) の楽園 Wechayan (Skr. Vaijayanti) の名で呼ばれるなど、タイの王廷生活は『ラマキエン』の伝統の中にあると言っても過言ではない。

『ラマキエン』の伝承はタイ族の日常生活の中にも生きている。タイ人の多くの者は Phra Ram 伝説に由来する名を持ち、親は子がこの伝説に登場する威力のある英雄の加護を受けることを期待する。また、巷間の言語表現に『ラマキエン』に関係するものが多い。例えば、腕白な子供は Thorapi あるいは Hanuman と呼ばれるが、これはこの伝説に登場する水牛あるいは猿王の名である。可愛らしい少女は Phra Ram の妃 Nang Sida (Skr. Sitā) に、力の強い若者は Phra Ram に、そして冗談を言う男は Phra Ram

の猿に喩えられる。さらに、Ayuthia, Lopbwi などの都市名、Sanphaya などの山名は、いずれも Phra Ram の物語の中に見られる。

このように、『ラマキエン』のタイ族に与えた影響は、非常に深く、かつ広いことが知られる。現在の舞踊劇は約200年前に Phra Ram I 世によって編述された物語詩からエピソードを上演しているが、それ以前には人形劇として、『ラマキエン』はシルエットあるいは影絵で上演された。その人形は鞣していない水牛皮を切抜いて2本の竹に張って作ったものであるが、訳者 VELDER は本書の中にこの人形を44図も挿入しており、Schattenspiel の資料として興味深いものがある。巻末の固有名詞索引はタイ語におけるサンクリット語の借用を検討するのに有用であろう。2葉の系図表は登場する人物の関係を知らるのに便利である。

訳文について批評することのできないのは残念であるが、流暢で判り易い。訳者は *Chieng Mai* に在住するようであるが、詳しいことは判らない。

(岩本 裕)

Nature and Life in Southeast Asia, Vol. III. Fauna and Flora Research Society, Kyoto, Japan, 1964. 466p.

大阪市大の東南アジア研究は吉良龍夫教授(理・植)を中心として着々とその成果を挙げておられる。この報告はその第3巻で、今までに行なわれた幾度かの調査隊の資料に基づき、生物学関係の報文が編集されている。

目次をひろってみると、

タイの蘚苔類 堀川芳雄・安藤久次(広大)

タイの淡水産軟体動物 波部 忠重(科 博)

タイの水ダニ類 今村 泰二(茨城大)

土壌内小節足動物の概観

今立源太良(東京医歯大) 吉良龍夫

タイのトンボ類

タイ・マレーのトンボ類 朝比奈正二郎(予研)

タイ・マレーの蝶類 川副 正人(日新高校・布施)

東南アジアの甲虫(Ⅲ) 中条 道夫(香川大) 他

タイにおける害虫防除の基礎調査 I

岩田久二雄(兵庫農大)

タイにおける狩猟蜂(Dieranorhina, Gastrosericus)の生態 岩田久二雄・吉川公雄(大阪市大)
タイにおける天敵としての狩猟蜂

吉川 公雄

熱帯の竹に営巣する前社会性膜翅類の巨大卵について

岩田久二雄

1961—1962東南アジア採集の医用双翅目について

加納 六朗(東京医歯大)

東南アジア採集のミバエ科・オドリバエ科

伊藤修四郎(大阪府大)

1961—62東南アジア採集のショウジョウバエ

岡田 豊日(東京都大)

と、まことに多彩である。次号はこのような生物相や各個生態の研究に加えて、森林相の研究、北西タイの民族植物学、北部東南アジアにおける宗教的標示の人類学的研究が予定されている。

大阪市大は本年度、さらにカンボジア計画を推進されていると聞いている。同大学の実行力に敬意を表するとともに、その成果について大いに期待したい。

(吉井良三)

Adam Curle: Educational Strategy for Developing Society—A Study of Educational and Social Factors in Related to Economic Growth, Tavistoc Publication, London & Liverpool, 1963. ix + 180p.

著者は、現在 Harvard 大学の The Center for Studies in Education and Development の教授兼所長であるが、以前は Oxford で社会心理学の講師をつとめ、1952年から1956年まで Exter 大学の教育学および心理学の教授であった。その後3年間 Pakistan 政府の社会問題顧問となり、1959年から1961年まで Ghana 大学の教育学講座を担当した。また、世界を広く旅行し、中近東の研究調査に従事したこともあり、本書はこうした広い経験をもとにして、東南アジアに限らず、新興諸国一般の開発問題を教育的・社会的側面から論じたものである。著者は、低開発の諸問題が本質的に、あるいは完全に経済的なものであるという仮定こそ、過去における誤りの主要な源であったとみなす。

低開発諸国はなるほど貧困である。しかし、それらの国はその人的資源がほとんど開発されていないが故

に貧乏なのである。人々は無知であるが故に貧乏であり、また貧乏であるが故に病弱であり、それら両者であるが故にほとんど生産することがなく、彼らはますます貧乏になる。行政は腐敗しており、農業は非能率で、工業はきわめて初歩的である。こうした状況から脱却して、正しい発展を達成するためには、国は、大きくて、強力ないわゆる「新階級」を生み出し、教育ある市民を相当程度もたなければならない。低開発の二つの大きな敵——伝統的な無気力および不平等な少数者による独裁的支配——を徹底的に破壊するにはこれ以外に方法はない、と著者はいう。「新階級」とは Galbraith の用語で、中産階級に代わる言葉である。つまり、この階級は、出生によってではなく、訓練または能力、あるいはその両者によって社会的地位を獲得し、伝統的な機構からじゅうぶん脱出した人々のことである。発展のための正しい条件を得るには、この新階級の出現が主要な要素となる。

そのためには、正規の学校制度による教育はもちろんのこと、地域社会の開発運動、文盲撲滅運動、成人教育、職場教育などを通じて、国民が彼らの運命を改善する energy と motivation を増大するよう啓蒙されなければならない。しかし、教育された人々が既存の経済によってじゅうぶん吸収され得ないとすればどうなるか。彼らは失業知識人の不満グループとして留まらざるを得ない。そこで、国の発展に必要な人々を吸収するために国の収容力を急速に増大するには何をなし得るかが問われなければならない。このような問題との関連において、農業、工業、行政などの面における教育の意義を分析し、最後に教育上の方策(strategy)を展開する。

文章は平易だが、じゅうぶんに整理されているとは言い難く、分析も浅い。結論として打ち出されているものにも特に目新しいものはない。むしろ、教育は開発の戦術的手段として留まるべきものかという疑問が残る。しかし、何はともあれ開発問題を教育的、社会的側面からとり上げた意義はじゅうぶん評価されてよい。

(高木英明)

UNESCO: *The Needs of Asia in Primary Education*, 1961. 60p.

本書は第11回ユネスコ総会(1960)のために用意さ

れたもので、その前に行なったアジアにおける義務初等教育拡張についての予備調査の結果を含んでいる。ここに提供された資料はユネスコ加盟国の公式のものであり、将来の20年間にわたるユネスコの援助計画にも関係するので、関係者の間に有益な参考資料を提供するものと思われる。

本書の内容は序章と四つの章と付録とから成っている。序章においては、過去10年間における初等教育の発展とユネスコの関心を述べ、その間初等教育在籍が1950年の3,870万から1960年の6,620万に増加し、さらに1980年には23,700万に拡張を計画していることを述べている。

第1章では、カラチ会議の採択事項を示している。カラチ会議は8,700万の文盲児童や6,500万の不完全にしか教育されていない児童の救済のために20年計画を立てたものであり、カリキュラムや教育方法の研究や、国際的な教育指導者の養成機関の組織化をも勧告している。

第3章では、20年以内に7年以上の普遍、義務、無償の初等教育制度を各国において立てるべきことを提案している。この一般的計画はインド、パキスタン、インドネシア、セイロン、韓国、マラヤ、フィリピン、タイ、ビルマ、カンボジア、ベトナム、アフガニスタン、ラオス、ネパール等の各国においてその進捗は異なるが、いずれも20年以内に目標達成の見込みがある。この20年計画はさらに細かく5年計画、年次計画に分けて立てられている。教育計画の基礎として総人口、学令人口を見積もり、所要教員や建物、財政需要を詳細に分析している。特に、この計画実施上の難関は財政であると指摘している。

第4章ではカラチ会議に提出したアジア地域計画のための参考案を示している。たとえば教育行政官の養成、教育指導者の養成、学校建築、教師と児童用の教科書や図書の発行などのために、ユネスコが、地域計画を立てるべきこと、そのために研究や教育のセンターを設けるべきこと、関係機関の協調、外部援助の確保などを説いている。

第5章では、カラチプランの実施は基本的には各国自身の責任であり、したがって各国の国家予算によって実施すべきことについて勧告している。外部援助を必要とする事項として計画、研究評価、財政をあげている。カラチ会議の勧告としては初等教育の目標、義

務教育年限、カリキュラム、教科書、教材教具、教授法と評価法、浪費、建築と施設、教員、管理と監督、福祉施設、特殊問題などについて詳説している。

最後に付録として、会議資料に用いた統計の解説や出所を示している。

本書はアジア諸国における義務教育の普及の現状と将来の発展計画の問題点などを知る上にきわめて便利で有益な文献といえよう。(高木太郎)

The Japan Ministry of Education: *Education in Asia*, 3 parts, 1963. 255p.

本書は、1963年10月3日～10日に東京で開かれたアジア地域教育計画研究者会議のために、討議のテキストとして用意されたものであり、日本の文部省調査局で作成されたものである。3部から成り、第1部は量的資料、第2部は非量的資料、第3部は付録となっている。

第1部の序論においてこの資料作成の経過を述べているが、1962年4月に東京において行なわれたカラチプラン参加国文相会議において経験した最大の困難の一つは、教育発展計画に必要な基礎的資料の不足であったという。そこで日本の文部省はユネスコの協力を得て、18か国に対して73調査項目に及ぶ質問表を送って回答を求め、9か国からの回答やその他ユネスコ関係の資料を基にしてこの報告書をまとめた。歴史的比較的综合的研究のための資料集作成を試みたが、不完全な中間報告に終わったといっている。

第1部では社会的経済的背景のもとに教育的な事実を見ようとしており、各国の人口構成、労働力、財政経済事情、生活水準について資料を整理しているのが特徴である。教育に関しては教育施設、児童生徒数、教員、学校学級規模、生徒の出身階層、在籍率、建築と施設、福祉施設、校外教育、教育財政等についての統計資料が56の表にまとめて整理提示されている。唯一の先進国日本との比較ができることも便利である。ところが先進国をもって任ずる日本が、ある教育条件においては他国に劣っているという皮肉な事実を見出すこともできる(たとえば学級規模)。しかし、日本が教育のあらゆる面において進んでいるという自画自賛的な資料提供に終わっているという傾向は注意して見なければならない。

第2部は学校制度、教育行財政、教育内容にわたって、質的な面からかなり詳細に比較考察がなされている。

第3部は付録としてセイロン、中国、日本、韓国、フィリピン、タイなど数か国の教育行政組織、中央地方行政機構、教育財政等に関する系統図と初等中等学校カリキュラム、日課表等に関する表をかかげている。

以上のように本書は、独自の観点から広く社会的経済的背景にわたる資料を集め、教育発展の現状をうらづけようとした努力は高く買うことができるが、惜しいことに回答した国が少数に限られ、包括的資料を得られなかった点は今後の問題とすべきであろう。

比較教育学の研究がとかく少数の先進国間の比較研究に限られる傾向が認められる際に、こうして後進国間の比較研究の資料が集められ提供されることは、資料としてはきわめて不じゅうぶんながら、新しい研究領域を開拓していく試みとして、有意義な企てといわなければならない。(高木太郎)

E. R. Leach: *PUL ELIYA—A Village in Ceylon, A Study of Land Tenure and Kinship*, Cambridge Univ. Pr., 1961. xiv + 344p.

調査地点はセイロンの乾燥帯に属する、中北部の人口146人のシンハリ人村落で、1954年の6月から12月および補充として1956年の8月に調査がなされている。

本書の特徴は、比較的短期間の調査ではあるが、問題点を土地所有制度と親族組織の2点に絞ったことであろう。その点、同じ著者の名著 *Political System of Highland Burma* 以上のものを期待する者にとっては失望の種となり得るだろう。

内容をみると、まず序説でこの書物が、セイロンの土地所有制度研究のためのものであると同時に、アカデミックな「社会人類学」への寄与でもあることを力説している。後者の場合著者の対象となっているのは、20世紀の第二・4半期から1950年代の終わり頃までイギリスの人類学研究の主流となっていた単系血縁集団の研究および、「単系原理」によって社会を安易に分類・総括してしまおうとする態度である。Leachは“Social Structure”を問題とすることには変わり

がないのであるが、Radcliffe-Brown らのいう静態的な社会構造を強く否定し、動く現実を写しとろうとする。この社会構造に対する根本的な把握から、イギリス人類学者が社会構造の中核と見なしてきた親族組織を Leach の立場から解明する。すなわち、素人にとってはごくあたりまえのことではあるが、親族原理がそれ自身で働いているのでもなく、なおさら親族組織が他の社会の諸制度を規制するものではないということである。

このような分析のために、第2章で歴史的、社会的な背景を比較的大局的にとらえ、第3章で土地利用の状況を説明した後で、親族組織に関して第4章をあてている。さすがに一流の学者らしく短いが要を得た説明である。しかし著者の目は、この親族組織にそそがれているのではなく、すでに第5章以下の土地所有制度に向いている。いわば親族組織までの4章が後の数章の説明の為の前置きともいえる。

第5章では「伝統的な土地」における土地所有制度、第6章では、それ以外の新しい土地の土地所有制度の詳細な説明と、実際に後づけの可能な1890—1954年の間の土地相続を1件ずつ記述している。この2章はもっとも読みにくい、本書の中核をなす部分である。

第7章では、労働に関する人間関係を土地の種類によって記述分析している。(前田成文)

Tjoa Soei Hock: *Institutional Background to Modern Economic & Social Development in Malaya (with special reference to the East Coast)*, Liu & Liu Agency, Kuala Lumpur, 1963. xxiii+283p.

著者 Tjoa Soei Hock (蔡瑞福)氏は評者の Malaya 大学訪問の際(1961)面識のある人で、当時 Malaya 大学の Malay Studies の講師をしていた人であり、また当時同大学の唯一の人類学者であった。氏は Indonesia の Sibolga に生まれ、中学および大学教育をオランダで受けた後一時中国に帰り、1956年再びオランダに渡り1958年いわゆる Non-Western Sociology & Economics を卒業した。Doctorandus (M. A. にあたる)をユトレヒト大学で受け、更にハーグの Institute of social studies で

1960年 M. S. S. を得た。主として後進国の社会と経済の研究をなして1963年ユトレヒト大学から Dr. の学位を獲得した。

評者の今次のマラヤ研究に際しては、再会と多少の調査協力の期待をして来たのであったが、氏はこの学位論文をその著書として残してマラヤを去り、三たびオランダに渡り、現在ハーグにある。

本書に見える著者の主要な Idea は、後進国の経済的発展は社会的な発展なくしてはあり得ない。この社会発展は社会制度の機能であり、社会制度とはその性格において、調整され、目的的であり、かつ反覆的な活動である。この社会制度は全体的な文化統合の一部であって、経済的な要素よりもフレキシビリティが遙かに少ない。だから経済発展だけを企劃し、西洋的な経済発展計画をおしつけようとしても、容易に受け入れられるものではない。ということにあるようである。

マラヤは周知のような複数社会の国であり、また複数民族国家である。マライ人と中国人とインド人がその主な構成民族であるが、マライ人、なかんずく東岸部のマライ人は後進性が強いという。彼らは同じ農業を行なっても中国人の如く働かず、低所得である。金銭を貯蓄して投資せず、金銭があれば黄金や宝石に変え、多額の金銭を結婚式、祖先祭、誕生祝などの Kendury (祭宴)に消費してしまう。このマライ人に経済的な発展のみを強制しても無理である。祭宴に多額の金銭を消費するのは馬鹿げて見えるけれども、それはイスラムの与える人生観、世界観と関係しているので、その調整を計らなければならぬと説いている。著者は極めて政治意識的であってこのような調整を計る発展計画委員にはイスラム神学者をはじめ、かくかくの専門家を加えよというような提言まで行なっている。また貯蓄に関してはイスラムが riba を高利貸として禁じ、利子の観念までを否定することに対しては神学的な再解釈までを要求するのである。

評者は本書の副題にある如く、特にマラヤ東岸に関連してと言う言葉につられ、東岸部の四つの村の実態調査が行なわれ、本書のはじめに四つの村の地図まで挿入してあるので、村落研究の参考になると考えて読みはじめた。なるほど本文中にこれらの村落について触れてあることはあるが、その調査というのはそれぞれ極めて短期間の学生と共に行なった村民とのインタビューだけであつたらしく、村落研究らしい記述は

ほとんど見当たらない。著者は常にマラヤ全体を意識し、マラヤの政策と経済と社会を国の全体的な統計を引用しつつ論じている。その意味で人類学の常識を遙かに越えた書物で、むしろマラヤの政治家やマラヤに投資せんとする資本家の好参考となるかと思われる。

勿論評者にとっても、マラヤについて本書から教えられるところは多々あるし、マラヤをよく知る者になければ書けない著書であるけれども、資料の集め方や基礎的な調査にそれ程の努力が払われていないのではないかという印象をうけざるを得なかった。

(マラヤにて、棚瀬襄爾)

**梅棹忠夫：「東南アジア紀行」中央公論社
1964. 374p.**

現在のベトナム、ラオスにおける政治的な不安定さは、著者らが1957年から58年にかけてこころみたようなインドシナ半島全域にわたる広汎な旅行を、一般にはほとんど許さないであろう。当時、反日的である、国情が不安定であるなどといううわさを耳に、緊張してカンボジアからベトナムに入ったとき、それらの不安は一掃され、あちこちで人々の歓迎と協力をうけたという。北ベトナムとの停戦ラインちかくを、ラオスへ山越えするのは、勇気のいることであつたらう。「やってみることだ。ベトコンにつかまったら、それも一つの経験だ。」という度胸は賞賛にあたいする。不安にもかかわらず、綿密に計画をたてる。ルートをさがし、情報をえる。ビザの期限にまで気をくばって、サイゴンを出発したときには、同行者をえている。ラオス国境に達する。哨兵の「ササゲ、銃」の礼とともに遮断機がスルスルとあがる。悠揚せまらず答礼してとおりにすぎるとラオスであつた。なにかトリックをつかったかのようなのだが、実は出国手つづきも、税関検査もすんでいないことを気にしているのだっ

た。ラオス国軍の国境警備屯田兵が旅券の検査をすませたとき、「ところで、あなたがたはこの国の人か」ときいた。一行は、心のそこからおどろき、兵士たちが文盲であることをしる。けれども、これっぽちも兵士たちを軽蔑したりはしない。逆に兵士たちの旅行者に対する親切さと、善意を理解するのである。

ラオス人やベトナム人は、国のなかでたたかっている。北ベトナムの鉱産資源、南の農産物、勤勉な国民の能力があるにもかかわらず、南北分裂はすべてをさまたげている。著者のなげかけた疑問はまだ解決されてはいない。

著者らのはじめての調査旅行、1957年に日本政府があたえた外貨枠は1人1日4ドルであつた。テープコーダーと銃を輸入するのにタイ政府税関では、1か月の期間を要した。バンコックを出発する日、ゆううつよさようならとよろこびいさむのだった。いわゆるタイ通のいう「タイの旅行は、おなじ景色ばかりでつまらない」に反撥し、広大な景観が、雄大に変化するのを、自らの目でたしかめ、かぎりない満足をおぼえる。

移動図書館と名づけ、必要な文献を車にもちこみ、観察したことを正確に知識として整理しながら旅行はつづけられた。

人間に対し、かぎりない愛情をもちながらも、冷静な被観察者となりうること、慎重に、そして大たんじくことをはこぶなど、著者のフィールドワーカーとしての態度にはまなぶべき点がおおい。

旅行中の経験や観察をならべたものでなく、著者の解釈や考えかたを述べ、各国の歴史にもふれるなど、たくみな紀行文でおもしろく読ませながら、現在世界的な注目をあびるインドシナ半島をうきぼりにしている。欲をいえば、著者が参照した文献の解説のようなものがほしい。地域研究を志すものならば、いちどは目をとおしておきたい。

(荻野和彦)